



2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の頻度と種類の一考察

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2023-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 淳也, 梅村, 拓未, 今, 竜一, 中島, 寿宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000026

2つの極小規模保育所における幼児の基本的な動作の頻度と種類の一考察

高瀬 淳也・梅村 拓未*・今 竜一**・中島 寿宏***

北海道教育大学旭川校保健体育教室

*北翔大学短期大学部

**北翔大学

***北海道教育大学札幌校保健体育教室

Case Study of the Frequency and the Use Fundamental Movement Skills in Two Young Children in Small-size Nursery School

TAKASE Junya, UMEMURA Takumi*, KON Ryuichi** and NAKAJIMA Toshihiro***

Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

*Hokusho College

**Hokusho University

*** Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究では、2つの極小規模保育所の5歳児を対象にして、自由遊びの時間に発現する動作の頻度と種類を調査し、極小規模保育所の運動遊びを充実させるための知見を得ることを目的とした。調査は、2つの極小規模保育所に通う5歳児男女1名ずつ、合計4名を対象とした。本研究の結果、『あるく』『たつ』が4名の幼児に共通して多く見られた。一方で、同じ遊びを繰り返して過ごす様子が見られ、一部の動作の頻度が高かったものの種類は少なく、一緒に遊ぶ友達の数が少ないことが要因と考えられた。その中で、対象幼児の女児1名は、一人遊びが多かったものの遊戯場にあるおもちゃや遊具を使いながら体を動かして遊んでおり、動作の頻度が高く種類も多かった。このことから、一人遊びでも多様な動作が発現したり動作を連続させながら遊べたりするような環境を工夫することが、人数の少ない保育所等における運動遊びの質の向上につながることを示唆された。

1. はじめに

幼児期は、生涯にわたって必要な運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期

(文部科学省, 2012)である。このため、この時期に遊びを中心とする身体活動を行い、多様な動作を経験していくことが重要と言える。特に、「より多くの友達と遊ぶ幼児のほうが運動能力が有意

に高く、複数の友達と遊ぶことによって身体活動が高まり、運動能力の発達に影響する」(森ほか, 2004, p.335) という報告があるように、友達と一緒に遊ぶことが、より多くの動作の経験につながっていくと考えられる。

しかし我が国では、第2次ベビーブーム以降の出生数が低下し続けており、内閣府(2022)によると2020年の出生数が約84万人で過去最少となるなど、少子化が大きな社会問題となっている。これまでも、少子化対策として様々な政策が打ち出されてきたものの、十分な効果が見られておらず、今後も少子化が進むと予想されている。少子化は、保育・教育機関に通う幼児の数の減少にもつながり、現在、定員割れを起こしている保育所や幼稚園等も少なくない。特にへき地や離島など人口減少が進む地域では、各年齢が1~2名で、場合によっては欠員が生じる年齢もあり、全幼児が10名程度の極めて人数の少ない保育所(以降、極小規模保育所)も存在する。極小規模保育所では、同年齢の友達が少ないため一人遊びが多くなり、友達と集団で遊ぶ場面が発生しにくい。文部科学省(2005)は、少子化の進行によって「子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響しあって活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている」と述べている。極小規模保育所ではこのことが顕著に表れており、運動遊びを通した多様な動きの経験も乏しいことが予想される。

これまで少子化に関する様々な調査や報告が行われてきているが、その中でへき地や離島などにある幼児数の少ない保育・教育機関を対象とした調査・報告では、統廃合による地域の影響や保育制度に関心が向けられる傾向にある。一方で、極小規模保育所のように極めて少ない人数でどのような遊びが行われているのかなどの実態調査は、ほとんど行われてきていない。そこで本研究では、友達の数に影響を受けやすい運動遊びに焦点を当て、2つの極小規模保育所において、遊びの中どのような動作が発現するのかについて調査し、極小規模保育所の運動遊びを充実させるための示

唆を得ることを目的とした。

2. 方法

2.1. 対象保育所及び対象幼児, 調査期間

本研究は、北海道上川管内の2つの市立保育所に在籍する5歳児を対象にし、2022年8月下旬から9月上旬にかけて行われた。A保育所は、全幼児10名のうち、5歳男児と女児の1名ずつを対象とした。B保育所は、全幼児7名のうち5歳男児1名女児2名であったが、5歳女児1名が調査した3日間のうち1日を欠席したことから対象から除外した。各保育所の年齢の人数は、表1に示した。また、保育者は、どちらの保育所も常勤が2名おり、加えて曜日によって1~2名の非常勤の保育者が保育に当たっていた。

表1 2つの保育所の各年齢の幼児数及び保育者数

	A保育所	B保育所
年齢構成	5歳児…2名 4歳児…3名 3歳児…1名 2歳児以下…6名	5歳児…3名 4歳児…0名 3歳児…0名 2歳児以下…4名

2.2. 対象保育所の遊戯場について

A保育所は、遊戯場の広さが約100平方メートルであった。遊戯場には、複合型滑り台、トランポリン、鉄棒、跳び箱、平均台が常設されていた。また、ウレタン積木もあり、いずれも幼児が自由に使って遊ぶことができた。その他、様々な大きさのボールが合計で約20個おいてあった(図1)。

B保育所は、遊戯場の広さが約90平方メートル

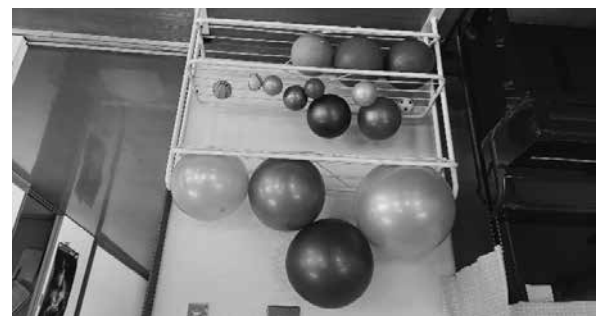


図1 A保育所のボール



図2 B保育所の複合遊具

であった。遊戯場には複合遊具（図2）とマットがあり、入り口の反対側には縦2m、横9m、高さ0.5mのステージが設置されていた。ウレタン積み木や平均台もあり、これらを自由に使って遊ぶことができた。ボールは、図1のようにゴム製のボールが約10個、その他テニスボールが約30個あった。

2.3. ビデオ撮影および映像の分析方法について

本研究では、幼児が登所後に各保育所の遊戯場で朝の会が始まるまでの自由遊びの様子を、死角が生じないように調整しながら3台のビデオカメラで撮影した。その映像から、各保育所の対象幼児2名がそろった9時10分から9時30分に発現した動作を分析した。出現した動作については、撮影した映像から、遊びの中の動作が吉田（2005）の基本動作42種のどれと合致するかを検討し、時系列にそって記録しカウントした。吉田（2005）の基本動作42種は、幼児の遊びに見られる動作を類似性・系統性・連続性を考慮して整理されており、本研究の結果を基に、極小規模保育所に通う幼児の実態や課題の解決等を検討する際にも有効な資料にもなると考え、用いることとした。また42種の運動は、基本動作とそれぞれの具体的な動作が示されており、それに倣い本研究では、基本動作を『』、具体的な動作の例を〈〉で示すこととした。なお、本研究が対象保育所の遊戯場で行われることから、『およぐ』『ほる』については除外した（表2）。

動作の開始や終了については、油野（1988）、及川（2014）、真砂（2018）、高瀬ほか（2022）の先行研究を参考に、以下のようなルールを設定し

てカウントした。

- ・カウントは、動作の停止、動作の後に別の動作が見られた時点動作の完了・区切りとする。
- ・動作が失敗したり、途中で中止したりした場合は、動作が完了していないと判断し、カウントしない。
- ・動作が完了するまでに複数の動作が含まれる場合（立った状態から、一度しゃがんでから座るなど）は、最終的な動作をカウントする。
- ・保育者の援助を受けて動作が遂行される場合は、幼児の動作遂行能力などを考慮してカウントの是非を判断する。

以上の観察方法を3回繰り返して行った。カウントに相違のあった個所については、遊びに見られた動作について再度見直し、必要に応じて動作の定義の見直しや追加・修正を行いながら、カウントの有無を判断した。

2.4. 倫理的配慮

調査にあたっては、対象保育所の所長に了承を得た上で、保育者から保護者に対して書面で研究の意義、調査の方法、データ管理、データの使用範囲、参加の拒否ができることなどについて説明を行った。なお、本研究は北海道教育大学の研究倫理委員会の審査で承認を受けて実施した。

3. 結果

2つの保育所で発言した動作のカウント結果については、表2に示した。以降、保育所毎に結果を述べていきたい。

3.1. A保育所の結果

A保育所は、5歳児の男女が一緒に遊ぶ様子がほとんど見られず、2名とも一人遊びまたは下の年齢の幼児と遊ぶ様子が多く見られた。1日目は、男児は遊戯場にある机の下に入って基地作りをしており、おもちゃを運ぶために移動する以外は、机の下で一人遊びをしていた。女児は、トランポリン、鉄棒、積み木の積み上げ、保育者とじゃんけん、エアサンドバッグにまたぐ、跳び箱からの跳び下りなどが見られた。2日目は、男児は三輪

車、トンネルくぐり、跳び箱を使って基地づくり、
 女兒は工作、トンネルくぐり、エアサンドバッグ
 をたたいたりひきずって移動させたりして遊んで
 いた(図3)。3日目は、男児は4歳児と一緒に三輪
 車に乗り、女兒は紙飛行機を作って飛ばす遊びが
 中心で、とちゅうで男児、女兒ともピアノを弾く
 こともあった。

A保育所の2名のカウント数を見ると、男児は
 三輪車に乗って遊ぶこと
 が多く『こぐ』動作が『た
 つ』動作に次いで多いが、
 他の動作は、ほとんど見
 られなかった。一方の女
 児は、『あるく』『はしる』
 動作が多く、男児に比べ
 るとカウントされた動作
 の種類も多かった。



図3 エアサンドバッグで遊ぶ様子

3.2. B保育所の結果

B保育所は、対象児2名が一緒に遊ぶことが多
 いものの、一人で遊んだり、2歳児と一緒に遊ん
 だりすることもあり、遊びの形態が様々であった。
 主な遊びとして、1日目は、ウレタン積み木や平
 均台を並べてフラフープやボールを転がしたり、
 2歳児1名と一緒にブロックを使って遊んだりして
 いた。2日目は、保育者が回す縄を跳び「大波小波」
 で遊んでいた。1名が遊んでいる間、もう1名はス
 テージの上で順番を待つということを繰り返して
 いた(図4)。約15分遊んだあと、2名はウレタン
 積み木を使って遊んでいた。3日目は、男児は保
 育者とカードゲームでほとんどの時間を過ごし
 た。女兒は、ウレタン積み木を使って囲いを作り、
 2歳児2名とおままごとをしていた。



図4 保育者が回す縄を跳ぶ様子(左)と順番を待
 つためにステージにのぼる様子(右)

B保育所の5歳児2名は、一緒に遊ぶことが多
 かったため遊びの頻度や種類のカウント数が似た
 数値であった。特に2日目は同じ動きを繰り返して
 いたため、〈よじのぼる〉〈とびおりる〉など『の
 ぼる』動作や『とぶ』動作のカウント数が多く見
 られた。また、ウレタン積み木を使った遊びが多
 く見られ、男児は上に高く積み上げて遊んでおり、
 〈もちあげる〉〈かつぐ〉〈おろす〉などの『もつ』
 動作や〈つみあげる〉〈くずす〉などの『つむ』
 動作が多く見られた。一方の女兒は、ウレタン積
 み木を並べることが多く、『はこぶ』動作や『つむ』
 動作が多く見られた。

4. 考 察

本研究の結果、『あるく』『たつ』が4人に共通
 して動作のカウント数が多かった。これは、4人
 とも対象となった20分間に、おもちゃや複合遊具
 のある場所に移動する動作が多く見られていたこ
 とや、おもちゃを使って遊ぶ際に地面に座って遊
 び、その後、別のおもちゃを取りに立ち上がって
 移動するというように、『あるく』の動作の前後
 には〈すわる〉〈しゃがむ〉〈たちあがる〉などの
 『たつ』動作が伴っていたため、カウント数が多
 くなっていたと考えられる。約30年前に行われた
 油野(1988)の調査や年長児51名を対象にした真
 砂(2018)の調査でもこれらの動作のカウントが
 多かったと報告されている。このことから、『あ
 るく』『たつ』は、30年前の幼児とも傾向は変わ
 らず幼児にとって多い基本的動作であり、在籍す
 る幼児の人数にも影響されにくいことが考えられ
 る。

また、他に多い動作を見ると、B保育所では『と
 ぶ』『のぼる』が2名に共通してカウント数が多か
 った。これらの動作が多く見られた場面は、2日目
 に保育者が「大波小波」を歌いながら回す縄を5
 歳児の1名が跳び、もう1名は跳んでいる幼児が縄
 に引っかかってしまうまでステージの上で壁に寄
 りかかって待つ、ということが繰り返し行われて
 いた。このステージは床から約0.5mの高さがあ

り、順番が来るたびに『のぼる』動作が見られていた。「大波小波」の遊びは調査対象時間の約15分間行われていたため、「縄跳びを『とぶ』」「ステージに『のぼる』』という動作のカウント数が多くなったと言える。同様に、A保育所の男児は、3日間の調査日のうち、2日間の多くの時間を三輪車に乗って過ごしており、『こぐ』動作が多くカウントされた。本研究では、B保育所の2名やA保育所の男児のように、調査した時間のほとんどを同じ遊びをして過ごす様子が見られていたため、一部の動作のカウント数が多くなったと考えられる。長野ほか（2018, p.76-77）が保育園での自由遊びの様子について、対象幼児の5歳男児1名は「三輪車を乗り回していると、友達がサッカー遊びに興じているのを目にし、自分もサッカー遊びに加わり、いつの間にか三輪車で遊びに戻っていた」、5歳女児1名については「缶ぽっくりでしばらく遊んでいたが、とちゅうからは男児と鬼ごっこに興じていた」と報告している。このように一定の人数がいる保育所では、自分と異なる遊びをする友達の様子を見て真似してみたり一緒に遊んだりしたりというように、友達の遊びに刺激を受けて遊びを変えていくことが多い。特に運動遊びでは、「友だちと一緒に行くことは、相手に動きを合わせたり、相手の動きを予測しながら自分の動きを決めたり、役割が異なると動きが変化するなど、同じ遊具や技能が同一であっても、かわる人や人数の変化などにより動きに変化、発展が生まれる。」（岩崎, 2018, p.85）というように、一緒に遊ぶ友達や集団の大きさによっても遊びが変化し、その中で多様な動作の経験ができると考えられる。逆に、極小規模保育所のように同年代や前後の年齢の友達が非常に少ない環境では、集団で遊ぶ場面が少ないために遊びに変化が生じにくいと言える。本研究でも、B保育所の2名とA保育所の男児にとっては、遊びを変化させるきっかけが少なく、一部の動きのカウント数が多くなったと考えられる。

一方で、カウント数の少なかった動作を見ると、『ける』『なげる』『ボールをつく』『ころがす』

などボールを使った際に見られる動作が、A保育所の女児は『なげる』が11回であったが、他の動作は4人とも少なかった。ボールを使った遊びも、キャッチボールをはじめ、サッカー、ドッジボールのように一定の人数がいなければ成立しないことが多い。極小規模保育所ではボールを使って一緒に遊ぶ仲間がほとんどいないため、一人遊びでボールを使っても長続きせず、ボールを使って遊ぶこと自体ほとんどない状況も考えられる。小学校の体育授業は、学校教育法施行規則第51条に低・中学年は年間105時間（1年生は102時間）、高学年は90時間が標準授業時数として設定されている。そのなかでボールを扱う領域は、他の領域に比べ多くの授業時間が配当されている。このことを踏まえると、集団遊びがしにくい極小規模保育所において、小学校入学前にある程度のボール操作技能を身に付けられるよう、ボールを扱う遊びを意図的に取り入れていくことが必要と言える。

このように極小規模保育所では、幼児の数が少ないことで、多様な動作を経験しにくいことが課題としてあげられる。このような場合、「指導者自身が、ときには少し年上のおにいさん、おねえさん役になってあこがれの存在になったり、遊びのリーダーとなることが子どもの遊びを豊かにすること、すなわち多様な動作を引き出すことにつながる」（吉田, 2005, p.510）という報告のように、保育者が多様な動作を経験できるような援助も重要と考えられる。しかし、本研究対象の2つの保育所では、2歳児以下がA保育所では6名、B保育所では4名在籍している。幼児の数が少ないとはいえ、異年齢の集団が遊戯場のように1つの空間で遊ぶと、2歳児以下の幼児1名に保育者1名がついて対応が必要となる場面が多く、4, 5歳児に援助が届きにくいことも予想される。全国的に保育者不足も問題となっており、へき地や離島なども同様の傾向にあることを考えると、保育者の援助の他にも、策を講じる必要がある。

本研究の対象幼児4名の中で、A保育所の女児は、一人遊びの時間が多かったものの、遊戯場にあるトランポリンを使って跳ねたり跳び箱によじ

登ってソフトマットに向かって跳び下りたりなど、遊戯場にあるおもちゃや遊具を使って活発に遊んでいる様子も見られた。また、「走りながらエアサンドバッグを倒す」「助走をつけて紙飛行機を飛ばす」のように、複数の動作を連続して行う様子が見られ、他の3名よりも動作の種類が多く頻度が高かった。杉原（2011, p.460）は「運動能力の低い子どもは運動パターンを単独で行うことが多いのに対して、高い子どもは運動組み合わせのかたちで多く経験している」と述べている。このことから、一人遊びでも多様な動作が発現したり動作を連続させながら遊べたりするような環境を工夫することが、極小規模保育所のように幼児の数が少ない保育所等における運動遊びの充実につながっていくと考えられる。

5. まとめ

本研究では、2つの極小規模保育所の5歳児を対象にして、自由遊びの時間に発現する動作を調査し、極小規模保育所における運動遊びを充実させるための知見を得ることを目的とした。本研究の結果、以下のようなことが明らかとなった。

- 『あるく』『たつ』が4人に共通して動作のカウント数が多く、これらの動作は幼児期の遊びの中で特に多い動作であり、まわりの友達の数に影響されにくい。
- 極小規模保育所のように友達の数が少ない環境下では、友達からの刺激が少なく、同じ遊びを繰り返して自由遊びの時間を過ごす傾向がある。
- 本研究の対象保育所では、ボールを使った遊びがほとんど発生せず、『なげる』『ける』などの動作が見られなかった。小学校の体育授業への円滑な接続を見据え、人数の少ない保育所等では、意図的にボールを使って遊ぶ場面を設定することも考える必要がある。
- A保育所の女児は、一人遊びが多かったものの遊戯場にあるおもちゃや遊具を使って活発に体を動かしており、発現した動作の種類が4人の中で最も多かった。このことから、一人遊びで

も多様な動作が発現したり動作を連続させながら遊べたりするような環境を工夫することが、幼児の数が少ない保育・教育機関における運動遊びの充実につながっていくと考えられる。

引用・参考文献

- 油野利博（1988）幼児の自由遊び中における動きの種類について．鳥取大学教育学部研究報告教育科学，30：263-273.
- 岩崎洋子（2018）遊びの変化や発展を考える．岩崎洋子編著，保育と幼児期の運動あそび．萌文書林，pp.85-86.
- 長野康平・浅川孝太・倉茂花苗・中村和彦（2018）保育園と公園での自由遊びにおける身体活動量と発現する基本的動作．日本幼少年健康教育学会誌，4：71-80.
- 内閣府（2022）少子化をめぐる現状．令和4年版 少子化社会対策白書 全体版（PDF版）．
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2022/r04pdfhonpen/pdf/s1-1.pdf>．（最終参照日 2022年11月10日）.
- 真砂雄一（2018）幼児における基本的な動きの種類と出現頻度について．埼玉東萌短期大学研究紀要，16：99-106.
- 文部科学省（2005）子どもたちの育ての現状と背景．初等中等教育分科会（第34回）配布資料2．
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1395404.htm．（最終参照日 2022年11月10日）.
- 文部科学省（2012）幼児期運動指針．
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm．（最終参照日 2022年11月10日）.
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版．
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・近藤充夫（2004）園環境が幼児の運動能力発達に与える影響．体育の科学，54（4）：329-336.
- 及川直樹（2014）幼児の遊びの中で発現する基本動作の実態と関連要因の検討－地域子育て支援拠点を利用する親子を対象に－．発育発達研究，62：44-55.
- 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・中本浩揮・筒井清次郎・鈴木康弘・近藤充夫（2011）幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係．体育の科学，61(6)：455-461.
- 高瀬淳也・高橋正年・河本岳哉・村上雅之・中島寿宏（2022）極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察．北海道教育大学紀要教育科学編，72(2)：377-384.
- 吉田伊津美（2005）動作の理解，指導内容の理解．体育の科学．杏林書院，55(7)：507-511.

表2 対象幼児3名の4日間の合計及び基本動作と具体的な姿
(基本動作及び具体的な姿は、吉田(2005)を引用)

基本動作	A 保育所		B 保育所		具体的な姿	
	男児	女児	男児	女児		
平衡系動作	まわる	0	3	0	0	まわる ころがる
	おきる	0	1	7	8	ねる ねころぶ おきる おきあがる
	たつ	59	46	72	76	たつ たちあがる かがむ しゃがむ すわる かたあしでたつ つまきでたつ
	くむ	0	0	0	0	つまかさなる くむ おんぶする
	わたる	2	0	4	10	わたる とんでわたる あるいてわたる はしってわたる またぐ
	さかだち	0	0	0	0	さかだちする
	ぶらさがる	0	1	0	0	ぶらさがる
	のる	5	7	3	1	のる のりまわす
移動系動作	はう	2	2	4	7	はう 四足ではう
	あるく	20	62	47	84	あるく ふむ よこむきであるく うしろむきであるく つまきであるく すりあしであるく とまる
	のぼる	6	33	42	50	のぼる はいのぼる よじのぼる とびのる おりる すべりおりる とびおりる
	とぶ	0	1	23	21	とぶ とびつく とびあがる とびこす ジャンプ かたあしけんけん
	はねる	1	18	0	1	はねる スキップ ホップ ギャロップ 2ステップ
	はしる	6	43	14	7	はしる かける おいかける にげる かけあがる かけおりる
	くぐる	3	4	0	2	くぐる くぐりぬける はいる はいりこむ
	およぐ	0	0	0	0	およぐ もぐる
	すべる	0	0	1	0	すべる
	かくれる	0	0	0	0	かくれる
かわす	0	0	0	0	かわす よける	
操作系動作	つかむ	0	1	1	2	つかむ つかまえる とる にぎる かかえる つかまる だきつく しがみつく
	もつ	5	18	38	11	かつぐ もつ あげる もちあげる おろす おく
	なげる	0	11	0	1	なげる なげあげる あてる ぶつける なげおとす
	ける	0	1	0	0	ける けりあげる けりとばす とめる
	あてる	0	1	0	0	あてる あたる ぶつける ぶつかる
	とる	0	0	0	0	とめる うける うけとめる うけとる
	ほる	0	0	0	0	ほる けずる すくう
	ふる	0	0	0	5	ふる ふりまわす ゆらす ふりあげる ふりおとす ふりかける
	はこぶ	6	4	6	28	はこぶ うごかす
	わたす	0	0	4	0	わたす
	ささえる	0	0	0	0	ささえる
	つむ	0	0	10	11	つむ つみあげる くずす
	たおす	4	13	0	0	たおす おしたおす
	おす	0	1	0	0	たおす つきおとす おす おしだす おしのける
	おさえる	0	1	0	2	おさえる おさえつける もたれる もたれかかる よりかかる
	ひく	3	5	2	2	おこす ひっぱりおこす ひく ひっぱる ひきあげる
	うつ	2	7	0	3	うつ うちあげる うちとばす たたく たたきつける パンチ
	こぐ	37	0	0	0	こぐ
	まわす	0	0	0	0	まわす
	つく	0	0	0	0	つく つつく さす つきさす
ボールをつく	0	0	0	0	ボールをつく	
ころがす	0	0	0	0		

(高瀬 淳也 旭川校教授)
(梅村 拓未 北翔大学短期学部講師)
(今 竜一 北翔大学講師)
(中島 寿宏 札幌校教授)

